

国語科における指導の重点（身に付けさせたい力）※学習指導要領に照らし合わせて	
ア 知識及び技能	イ 思考力、判断力、表現力等
当該学年までに配当されている漢字を読んだり書いたりすることができる。	目的や意図に応じて、自分の考えが伝わるように文章を整えることができる。

	児童・生徒の学力の状況（課題）	授業における具体的な手だて	成果検証（2月）
第4学年	ア 漢字の読み書きにおいて、当該学年までに習得すべき漢字に対する定着度に個人差が大きく、ほとんど書けない児童とほとんど書ける児童との間に大きな開きがある。 イ 自分の考えを目的や意図に応じて文章にまとめる力において、主語、述語、修飾語を使つての具体的な文章を作成する力は、全体的にまだ身に付いていない。	ア 毎週、漢字のミニテストを行い、本学年で習った漢字の確かめを行っている。また、3年生までの漢字については、日記を活用して、日常的に漢字を使う場面を取り入れたり、授業内で漢字に触れるゲームや互いに学び合う機会を設けたりして、漢字への関心と定着を促す。 イ 授業の中で文章を書くときには、具体的に書くように声をかけ、どのような文章がよかったか、共有を回り上手な文章が作成できるようにしていく。また、国語の読みもの教材の時に、文章の分かりやすい所や伝わりやすい所を友達と伝え合う活動を取り入れ、良い文章とはどのような文章なのか知れるようにする。	ア 市学力調査【知識・技能】 イ 市学力調査【思考・判断・表現】 所見
第5学年	ア 1 割の正答率の児童から 9 割の正答率の児童まで、漢字の読み書きの正答率は、個人差が大きい。 イ 自分の考えをもち、表現することに課題がある。主語・述語・修飾語等の文法を正しく理解し、文章に書き表す力に個人差がある。	ア 全教科を通して文章の中で漢字を使う経験を重ねたり、音読や黙読等、読む機会を意図的・計画的に増やしたりしていく。 イ 文章全体の構成や展開が明確になっているかなど、文章に対する感想や意見を伝え合う機会を増やす。その中で、自他の文章の良いところを見つける活動を取り入れる。	ア 市学力調査【知識・技能】 イ 市学力調査【思考・判断・表現】 所見
第6学年	ア 漢字の読み書きにおいて、当該学年までに習得すべき漢字に対する定着度に個人差が大きく、ほとんど書けない児童とほとんど書ける児童との間に大きな開きがある。 イ 自分の考えを目的や意図に応じて文章にまとめる力において、文章構成や表現の工夫に大きな個人差があり、考えを的確に伝えられる児童と、伝えることが難しい児童との間に差が見られる。	ア 漢字の習得状況に応じてドリルや補充プリントを活用し、書けない児童には繰り返し練習や視覚的に覚える活動を取り入れる。また、授業内で漢字に触れるゲームや互いに学び合う機会を設け、漢字への関心と定着を促す。 イ 文章構成の基本や表現の工夫についてモデル文を提示し、全体で構成や表現のポイントを共有する。さらに、段落ごとの書き方や接続語の使い方などを段階的に指導し、書いた文章を友達と読み合う活動を通して、自分の文章を客観的に見直す力を育てる。また、書く前の話し合いやメモ作りの時間を十分に確保し、考えを整理してから書く習慣を身に付けさせる。	

■「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けた一人1台端末等 ICT の効果的な活用について	■学習の見通しをもたせることや学習を振り返ることの工夫等、「学びに向かう力」の育成に向けた取組について
4年： 一人 1 台端末を活用し、自分の考えを整理・可視化するとともに、友達と考えと比較・共有しながら、多様な見方や考え方を広げる学びを行う。ドリルやデジタル教材を活用し、一人一人の習熟度に応じた学習を進める。 5年： ドリルやデジタル教材を活用し、一人一人の習熟度に応じた学習を進める。 6年： 意見を共有する場面では、共同編集機能や画面共有を通して、互いの考えを比較し合い、よりよい表現や考え方を見つけ出す協働的な学習を取り入れることで、自分の考えを深める力や多様な考えを受け入れて再構成する力、情報を整理・活用する力を育てる。	4年： 毎回振り返りを行い、次時のはじめは児童の振り返りから授業を始めている。児童の疑問や興味を授業に取り入れられるようにし、学びに向かえるようにする。 5年： 毎回振り返りを行い、次時のはじめは児童の振り返りの共有から授業を始めている。これにより、児童が学び取った内容をもとに単元を進め、児童の学びの実感を十分に味わわせる。 6年： 授業の終わりには振り返りフォームやデジタルポートフォリオを活用して、自分の学びを言語化させることで、児童が自ら学習の目標を意識し、達成度を客観的に捉える習慣が育ち、主体的に学びに向かう力や自己調整力の向上を図る。

算数科・数学科における指導の重点（身に付けさせたい力）※学習指導要領に照らし合わせて	
ア 知識及び技能	イ 思考力、判断力、表現力等
整数、小数及び分数の性質を理解するとともに、それらの計算の意味について理解し、計算することができる。	数量の関係や問題場面の数量の関係などに着目して捉え、根拠を基に筋道立てて考えている。

	児童・生徒の学力の状況（課題）	授業における具体的な手だて	成果検証（2月）
第4学年	ア 小数や分数の仕組みは理解できていない児童が多い、計算はできる児童とできない児童の差が大きい。 イ 問題に対して自力で解決したり、複数の解決方法を見出したり、適切に説明し伝え合ったりする力が身に付いていない児童がいる。	ア 計算ドリルや東京ベーシックドリル・ICT 機器を効果的に活用し、4年生の基礎的・基本的な知識の確実な定着を図る。 イ 授業の中で毎時間、自分の考えを共有する場面を設け、仕組みや考えを理解できるようにする。	ア 市学力調査【知識・技能】 イ 市学力調査【思考・判断・表現】 所見
第5学年	ア 数量や図形の知識・技能の定着に個人差がある。 イ 問題に対して自力で解決したり、複数の解決方法を見出したり、適切に説明し伝え合ったりする力が身に付いていない児童がいる。	ア 計算ドリルや東京ベーシックドリル・ICT 機器を効果的に活用し、5年生の基礎的・基本的な知識の確実な定着を図る。 イ 毎時間既習事項を確実に定着させた上で、適切な手立てを用いて考えたり、筋道を立てて課題を解決したり、説明し合ったりする場面を適宜取り入れる。	ア 市学力調査【知識・技能】 イ 市学力調査【思考・判断・表現】 所見
第6学年	ア 既習事項が身に付いていない児童が多い。 イ 問題の読み取りや答えの根拠となる考えなどに苦手意識がある。	ア 単元に入る前に関連した既習問題を解いて、これから学ぶことのイメージを持たせる。 イ 問題からヒントとなるところに示すなど視覚的に提示する。また、交流の時間を設けて、友達の意見を聞き、苦手な児童の考えが浮かぶように支援する。	

■「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けた一人1台端末等 ICT の効果的な活用について	■学習の見通しをもたせることや学習を振り返ることの工夫等、「学びに向かう力」の育成に向けた取組について
4年：デジタル教材や AI ドリルを活用し、自分の理解度に応じて繰り返し学習や発展的な学習に取り組む。端末を使って考え方や解法を共有・比較し、互いの説明を通して理解を深める協働的な学びを充実させる。 5年：ドリルやデジタル教材を活用し、一人一人の習熟度に応じた学習を進める。 6年：学習の後半で ICT 機器を活用して発展問題に取り組み、学習の個性化を図る。	4年：毎回振り返りを行い、次時のはじめは児童の振り返りから授業を始めている。児童の疑問や興味を授業に取り入れられるようにし、学びに向かえるようにする。 5年：毎回振り返りを行い、次時のはじめは児童の振り返りの共有から授業を始めている。これにより、児童が学び取った内容をもとに単元を進め、児童の学びの実感を十分に味あわせる。 6年：単元前に既習事項を確認し、その定着を図ることで、思考のスタートラインを揃える。また振り返りから次の学びにつなげる。